フォーラムニュース　Vol.29　2021 8/20

発行：フォーラム･子どもたちの未来のために実行委員会

http://www.f-kodomotachinomirai.com/

文責／大竹永介

【2 回連続リレートーク①開催！】
子どもたちの現在と未来に向けて　わたしたちができることは？～5 人の熱いメッセージ～

6 月の前川喜平さんの講演会「子どもたちが危ない！　日本の教育はどこへ向かっているのか」を受けて企画された連続オンラインリレートークの第 1 回目が 7 月 17 日 14 時から開催されました。実行委員大竹による冒頭あいさつの後、やはり実行委員の一人である野上暁の司会進行によってスタート。トップバッターは「若おかみは小学生」シリーズなどで人気の作家令丈ヒロ子さんです。

デビュー以来、子どもたちに「生きるのが嫌にならないでほしい」という思いを一貫して持っていたという令丈さんが強調されたのは「大人と子どもが同等であることの大切さ」。大人のいうことをきいていればいいという視点だけはとらないようにしていると話されました。（写真は上段左から松本、野上、降矢、下段左から令丈、那須田、十々夜の各氏）

2 番目の発言者は「ペーターという名のオオカミ」で坪田譲治文学賞を受賞されたやはり作家の那須田淳さん。ベルリン在住の那須田さんのお話の中心は日本とドイツの教育の差。ドイツでは発言すること=考えることが教育、であり、自分の意見を言えない子どもの評価が低いとのこと。こうした考えはナチス時代への反省から来ていて、民主主義の根底にあるものなのだ、という言葉が印象的でした。

3 番手はイラストレーターの十々夜さん。文章ではなく絵を描く立場から、気持ちを読みやすく持っていくための工夫、キャラクターづくりや脇役にも気をつけていることなどを話されました。大人の目線が入ってしまわないように気をつけているとのこと。

十々夜さんからバトンを受け取ったのは絵本作家の降矢ななさん。スロバキアに住まわれている降矢さんは、当初日本のことにはほとんど関心がなかったそうです。それが

変わったきっかけは 2011 年の 3・11。日本はどうなってしまうのか、と強いショックを受けたといいます。

ここ 10 年ほどの日本の政治のひどさを語る降矢さん。子どもに見せたくない大人ばかり、という降矢さんは、子どもたちに対して勇気ある、気骨ある大人を書きたい、子どもを押しつぶしていく今の日本の教育は変えなくてはならない、と強く訴えられました。

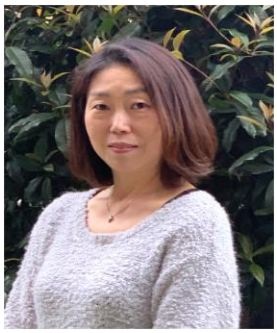
ラストバッターはちひろ美術館の常任顧問であり、評論家、作家でもある松本猛さん。しめくくりにふさわしく、道徳の教科化の問題が、最近の「表現の不自由展問題」「学術会議の任命拒否問題」等々、すべての「内面の自由の侵害」問題に通じると説き、人々が「発言しなくなる危機」を強く訴えました。

一通り発言が終わったところで 5 分間の休憩。その後のフリートークでは子どもの本と政治的な問題についての関わり方などについても意見が交わされました。

参加者の中からも「政治の問題はいやでもふれてしまうこと。気楽にやってもいいんではないか」（作家ひこ・田中さん）「子どもの頃の読書が今の自分を作っているということがよく分かった」（作家服部千春さん）「大人も自分の意見を表明することの大切さ感じ、勇気づけられた」（児童書専門書店奥山恵さん）という意見などが出され、若干の質疑応答があって 16 時に終了。充実したリレートークとなりました。

★参加された 4 人の方から感想を寄せていただきましたので、以下にご紹介いたします。（到着順）

●いとうみく



作家、画家、評論家とジャンルの異なるスピーカー5 名のみなさまは、それぞれの角度から今を生きる子どもたちと、子どもの本に携わる者としての思いを語られました。そのなかで面白いほど共通していたのは多様性というキーワードでした。

多様性を認めていける社会の基盤となる教育は、子どもたちが自ら考えること、思ったこと考えたことを発言するという経験です。「意見が違っても、間違えても怖くないということが大事」と那須田さんは語られました。

わたし自身、子どもの頃は思っていることをあまりことばに出来ない子どもでした。いつもどこか大人の顔色をうかがっているようなところがあったのです。

いまは言いたいことを言います。自分と意見の違う人の話は面白がって聞いてしまいます。なにがきっかっけで、いつからこうなったのかはよくわかりませんが、学校教育でないことだけはたしかです。たぶん、大人になり、仕事をしていろいろな人を出会って……そうした人との関わりの中で変わっていったのではないかと思います。

教育は学校だけではありませんが、子どもたちにとって学校は成長の場、学びの場であることは間違いありません。子どもに押し付けるような、黙らせるようなことはして

はいけない。そういう場であってはいけない。道徳の教科化などは大変大きな問題だと思います。

子どもたちがその子らしく生活できる場を作っていくのは、大人の役割です。

ですが、もう一方でわたしは、子どもはそんなにやわじゃない、理不尽さに屈しない強さを持っているとも思っています。考えること、発言すること、その力が根っこにあれば、ちょっと不自由な、ときに理不尽だと思える環境にあっても、子どもたちはそこを蹴り飛ばして、あるいは乗り越え、下からくぐって行けるのではないか……と。ただしそこには信頼できる大人の存在が必要だと思います。

人が人の中で、それぞれの人がそれぞれに自分らしく生きていくために必要なことは、自分で考えること、思いをことばにすること。それは子どもの(人の)権利です。戦後の児童文学作品の多くには、そうした願いがずっと込められているのではないでしょうか。（いとうみく：作家、『朔と新』で**野間児童文芸賞受賞**）

●編集者 S

入室に手こずってしまい、遅れての参加だったが、諦めずに参加できてよかった。それぞれの話を伺う中で感じたことは、子供時代に読んだ本のほうが実は学校で習ったものよりも印象強いことが多いということだ。

私自身も「スーホの白い馬」や「かたあしダチョウのエルフ」「宿題ひきうけ株式会社」「チョコレート戦争」など絵本や童話で読んだものは大人になっても忘れないし、鮮烈だった。今思えば、どれも十分に政治的、思想的なものが多く含まれていたと思う。

だからこそ児童書で表現することは多岐にわたるし、政治的なことも、学校、家庭で繰り広げられる日常生活から伝えているのだということは、参加者の共通認識だった。

ドイツの子供たちは中学生くらいから政治について活発に議論している。それに比べて日本では自分の意見や疑問を持つことが少なすぎるし、政治に関しても無関心なことが多い。そのように訓練してこなかった日本の教育にも問題がある。

日本らしい、言わなくてもわかる「空気を読む」が、必ずしも良いとは限らない。伝えないと伝わらないのだから、はっきりと表現していくことが、これからはますます大切だ。

エンタメやファンタジー、荒唐無稽な物語を通して日常生活にも多様性を感じて欲しい、一つだけが正しいのではない。自分の意見を持たないと、人の意見に流されてしまう。そのことに気づいて欲しい。

今の時代は戦前の雰囲気に近いものがある。もっと議論されていいものが、一つの方向へと進み、それ以外を排除する傾向が強い。このような中で児童書が果たす役割を十分に自覚して、作家、画家、版元が行動を起こしていかなくてはならないのだと改めて感じた。可能性のある場だからこそ、これからも信念を持って様々な本を作っていきたい。

●岡田なおこ

　コロナ禍で不自由・不本意・理不尽なことは多々あるが、身体障害者の私にとって「オンライン○○」が増えたことは有難い。車椅子での外出は、それはそれで楽しいが、自宅に居ながらにして著名な方々のお話を聴くことができ、「楽」をさせていただいている。

　ただ私のパソコン操作の未熟さで、毎回「定時！」にアクセスできない。今回の「リレートーク」も途中参加となり、まともな感想が書けないことを最初にお詫びしておく。

　さて、コロナ禍が深刻化し始めた 2020 年 3 月の「全国一斉休校」。私はあのニュースを「そんなこと無理でしょ」と甘く見ていた。しかし翌日近所の子どもたちが下校してくるのを見て、びっくりした。ランドセルに学習道具を詰めるだけ詰め込み、体育着やらなんやらを引きずって歩いているではないか！　よく夏休み前に「所帯道具」を担いで帰る子どもを見掛けるが、表情がまったく違う。「一斉休校」を強いられた子どもたちは俯いていた。

　多大なるリスクのおかげで(？)いったん感染が収まると喜んだのも束の間「ＧｏＴｏトラベルキャンペーン」で感染状況は逆戻りした。そしてオリパラのむちゃぶり開催。

　一方では相変わらず学校などの行事は規制され、地域でのふれあいも制限されている。こんな「不健全な環境」で育つ子どもたちが大人になった時、どんなツケが来るのか？　思い巡らせると恐ろしくなる。

　「リレートーク」でも話されていたが、子ども時代に読み聞きしたモノは生涯心の底に残ると思う。いや「遺る」と信じたい。

――子どもたちの現在、未来に向けて。わたしたちにできること？

　あまり「あたふたしないこと」だと思う。

　コロナ禍においてシフトチェンジせざるを得ない事はたくさんあるが、そんな時代こそ、「ふつう」が必要ではないだろうか。

　少なくとも私は「未来の大人たち」に向け、普遍的な作品を描き、「現在の子どもたち」に届ける。今まで通りに。（おかだなおこ：作家「薫 ing」で野間児童文芸賞を受賞）

●福田晴代

　作家、画家、翻訳家と多彩な方々がそれぞれ、子どもの本を書く（描く、翻訳する）ということについて、どのような気持ちでおられるのか、率直に語っていただき、大変面白く聞きました。前月に行われた前川喜平さんのお話を受けて、ということでしたが、私は都合で前川さんのお話を聞くことができなかったので、むしろ 5 人の方々の作品への向き合い方として新鮮な気持ちで受け止めました。

令丈ヒロ子さんの「（子どもが）生きるのがいやにならないように」「子どもの血肉になるような本を」、那須田淳さんの「（ドイツでは）自分の意見を言うことは怖くない」「論争があることは自明」、十々夜さんの「大人社会の目線が入らないように」、降矢ななさんの「勇気ある人、心に染みる絵を描きたい」「子どもを押しつぶす状況を変えないと」、松本猛さんの「日本はいま、大きな転換点に ”The point of no return”」、といった言葉が印象に残りました。

子どもの教育についても、日本の道徳の教科化に触れて、ドイツやスロバキアなどインターナショナルな視点も入り、興味ふかい議論を聞くことができました。折りしも、オリンピック開催までの過程で図らずも日本の歴史教育、ジェンダーや人権教育がいかに遅れているかが露呈しました。私はそれにもう一つ、大人の科学リテラシーの衰退を加えたいと思っています。日本では質の良い科学の読み物や絵本が出版されていて、大人の啓蒙書にもなりうるものがあります。ただ、その良さや内容をきちんと評価できる基礎的な知識を持ち続けている大人はかなり少ないと思います。それこそ「センスオブワンダー」を忘れてしまう大人のなんと多いことか。これもやはり教育の結果でしょうか。

政権が聞く耳を持たないまま開催されたオリンピックが終わり、案の定、コロナは感染が爆発的に拡大して、私たちに「安心安全」どころか分断と不安を残したままです。5 人の発言を聞いて色々な場で声をあげなければならないと思いました。

（ふくだはるよ：日本子どもの本研究会「子どもの本棚」編集長）

★リレートーク第 2 回も 7 月 31 日盛況のうちに開催されました。内容については次号にてご報告いたします。お楽しみに！

●フォーラムニュース第 29 号をお届けします。今号、次号と 2 号にわたって先月開催されました連続リレートーク「子どもたちの現在と未来に向けて」のレポートをお送りいたします●コロナ禍が終息し、一日も早くリアルなイベントを開きたいという思いは募るばかりですが、講師も参加者も、国や地域の差を乗り越えるオンラインの良さも痛感したリレートークでした。講師として、聴衆として、また裏方として参加してくださったすべての皆さんにあらためて御礼申し上げます●多くの国民、専門家の懸念も無視して強行開催されたオリンピックも終了しました。大会は成功だったと関係者は胸を張りますが、新型コロナの感染者数の爆発的拡大もまた、一方の事実です。国民の命と健康は本当に守られたのか？　私たちは現実から目を背けることなく、この「異常な」オリンピックを検証していく必要があると思います●フォーラムへのご意見、ご希望をお寄せください。メールのあて先は f.kodomo.mirai@gmail.com です●私たちのフォーラムも大変お世話になった那須正幹さんが 7 月 22 日に亡くなられました。子どもの心を大切にし、反戦と平和への確固とした思いを持たれた方でした。心よりご冥福をお祈りいたします（O）